

農福連携がつくる未来

「農福連携」という言葉をご存じだろうか。「障がい者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく取り組み」のことだ。

農業では従事者の高齢化や担い手不足により、農業に携わる人が減少していることが課題となっている。それに伴い、過去 1 年以上作物を作付けせず、数年の間に再び作付けする考えのない土地、いわゆる耕作放棄地も増加している。

一方、福祉分野では、障がい者が自分らしく生き生きと働くことができ、賃金を得られる場が求められているが、その場が限られているという課題がある。

そこで、双方の課題を解決する取り組みとして「農福連携」が注目されている。国は 2019 年に「農福連携に取り組む主体を今後 5 年で新たに 3000 創出する」と目標を掲げ、推進している。県も 12 年度より農福連携に本格的に取り組み、20 年に「三重の農福連携等推進ビジョン」を発表し、取り組みの加速を図っている。

しかし、一言で「障がい者の新たな働く場づくり」と言っても、働く場と人さえいればよいというものではなく、両者のニーズをうまくあわせることが必要となる。そこで重要となるのが「農業ジョブトレーナー」の存在だ。農業ジョブトレーナーは農業経営者と障がい者の双方に関わり、障がい者の適性に合った農作業や方法等について具体的な指導・助言を行っている。

一般社団法人三重県障がい者就農促進協議会では、農業ジョブトレーナーの養成を行っており、21 年度まで延べ 474 人が養成講座を修了した。

農業を通じて人と人がつながり、地域に活気が生まれ、持続可能な地域づくりにつながる農福連携の取り組みは、持続可能な世界を目指す「SDGs」の理念にも通じる。

それぞれが得意なことをいかすことで、お互いの可能性を広げ、共に地域で生きていく。そんな未来を望みたい。

(会員事業部 研究員 鈴木 理可)